

Cover Story

どうなるニホンウナギ

この時期になると毎回この話題を書いている気がするが、やはりうなぎ好きとしては土用の丑の日を前にすると書かずにはいられない。ニュースを聞いた諸氏も多いと思うが、先月とうとうIUCN（国際自然保護連合）によって、ニホンウナギが絶滅危惧 I B類に指定されレッドリストに記載された。実は日本では環境省が昨年、一足先に日本版レッドリストに記載していたが、それが国際的にも絶滅の危険がある希少生物として認知されたということである。

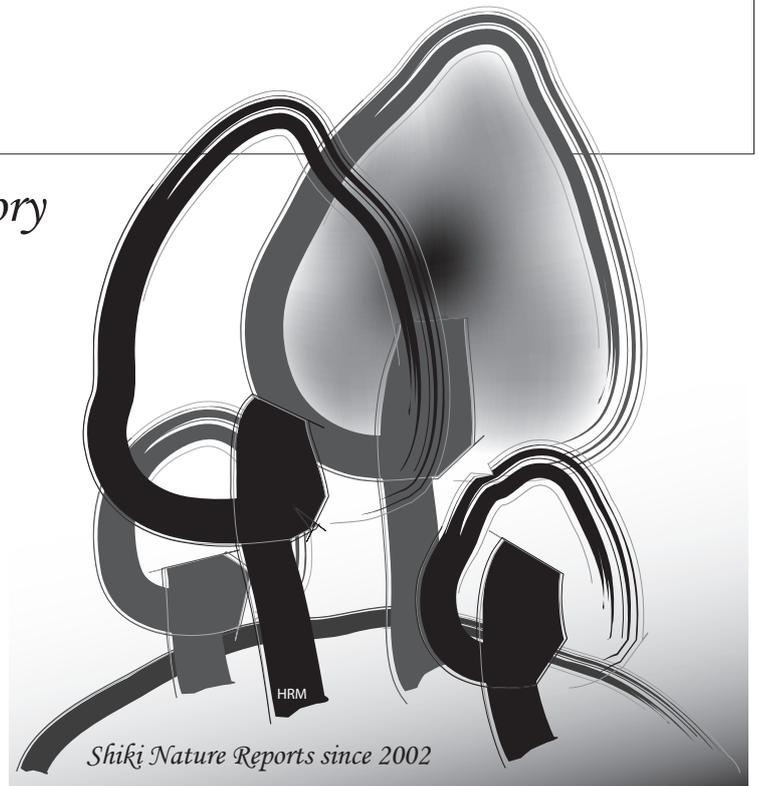
I B類とはさらにその上の I A類の次ということになるが、あのイリオモテヤマネコも2007年までは I B類（現在は I A類）であったし、野生種を見つけるのは奇跡的に難しいあのオオクワガタはさらに下ランクの II 類であることを例にすればウナギもかなり危機的であることがわかるであろう。

しかしレッドリストに載ったからといって獲ったら罰則があるわけでもなく、これはあくまでリストなのである。しかしIUCNのリストは世界中の国や保護団体などが拠り所とするデータであるので、例えば生物資源の商取引に関しては影響力の強いワシントン条約の規制対象の基準も当然このリストを拠り所とするわけである。次のワシントン条約締約国会議は2016年である。ここでニホンウナギもそのリストに載り、国際取引規制がかかる可能性は濃厚である。いよいよ行く所まで行った感じである。ここまでなぜニホンウナギが減ってしまったのか。理由は諸説あるが、他国からすれば日本人が食べ尽くしたと100%思われているし、それは否定できないと私も思う。それはニホンウナギの代替品として輸入されたヨーロッパウナギはその乱獲にあい、ニホンウナギ以上にさらに絶滅寸前に追いやられてしまった前例が証明している。もはや日本も、民間業者の自主的な努力に任せるのではなく、国がしっかりとした保護政策を打ち出してやらないと、国際社会にも嘲笑されることになるであろう。

一方、実は今年はシラスウナギの国内漁獲量が数年ぶりに増加した。昨年は過去最少の6 tまで落ち込み、その価格も宝石並みのキロあたり250万円まで跳ね上がったが、今年は12tを超え、キロあたり80万円くらいまでに下がったというのだ。しかし、50年前のピーク時200tに比べればたいした差はないのだが。

ということで少しは安くなったかと思い、先日さっそく「うな重」を食べに行った。しかしまったく昨年と値段は変わらず。それもそのはず、今年のシラスはまだ市場には出てきてないか。この秋くらいから少しは安くなるかも。でも、やはり美味でした。こんなすばらしい日本の食文化をなくしてはいかん。食べるだけじゃなく、きちんと保護を皆で訴えていきましょう。

(Izawa)



梅雨前線が着実に北上してきています。6月は天気予報で紹介されるレーダーや気象衛星の画像を見ると、いつも鹿児島や屋久島・種子島、奄美諸島あたりに雨雲があった印象が残っています。調べてみると、おおむね[※]の3割増しくらいで、特別に何か記録が更新されてはいないようです。

(※平年値：過去30年の平均値)

関東では6月上旬、本州の南岸を低気圧がゆっくりと東に進みながら、海から湿った空気が運ばれ大雨になりました。中頃は天気が落ち着いていましたが、下旬、今度は寒気が頻繁に南下するようになり雷雨が頻発しました。6月は太陽高度が最も高くなる時期です。太陽が出てくれば気温は高くなります。ここに上空から寒気が入れば、下層の暖かい空気との間で、上下の空気の入れ替えが起こります。この空気の入れ替えが所々で起こり局地的な大雨となるわけです。つい先日も朝霞で1時間に110ミリの大雨があったそうです。

7月に入り梅雨前線が北上し、いよいよ関東も大雨の時期になります。気象庁の1カ月予報(降水量)では「平年並み」か「やや多い」予報です。これは私の予想ですが、梅雨明けには時間がかかるのではないのでしょうか。というのも、ここのところずっとそうですが、偏西風の蛇行が大きくなっています。こういう場合、梅雨前線を北からブロックしているオホーツクの高気圧(通称ブロッキング高気圧といいます)も長く居すわる傾向があります。さらに北から寒気が入ることで雨もたくさん降るのではないかと予想しています。これは半分期待も入っているのですが、梅雨が少し長引いてくれた方が、あの暑い太陽の時期が少し短くなっていいかと思っています。

そういえば気象庁の夏の予報で「エルニーニョ現象で冷夏」と言っていたのが、いつの間にか「平年並みの夏」に修正されていました。ということは、平年並みに暑いのでしょうかね…

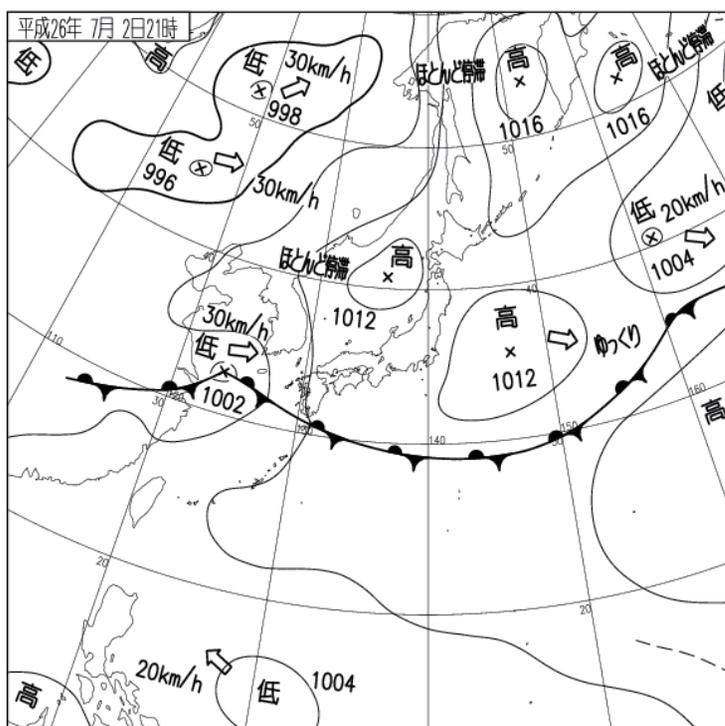


図 2014年7月2日天気図

梅雨前線はオホーツク海の高気圧の勢力が強く北上を妨げられている。オホーツク海の高気圧はほとんど停滞しており、梅雨前線が北上できないことからブロッキング高気圧ともいう。

ポール・フライシュマン著「種をまく人」（あすなろ書房）は、ゴミ捨て場だった空き地に一人の少女がまいた種から始まる物語である。

この学校の敷地は毎年新たな発見があって驚かされるが、その一つに「去年ここにはなかった植物が今年は根づいて花を咲かせている」たぐいの植物勢力図の変更がある。

最初はその植物の繁殖力に単純に驚いていたが、ある年、ふと「誰かが種子をばらまいているのではないか？」という疑念に囚われるようになった。もちろん故意にはない。意図せず、である。

そんなことがあるか、と考える人もいるだろうが、植物の繁殖戦略は相当にしたたかである。数ある種子散布様式の中に「動物散布」と呼ばれるものがある。これは動物の体に種子を付着させたり、わざと動物に食べられるようにしておいて糞と共に散布するなど、様々な方法があるが、微小な種子は泥などと一緒に脚に付着して移動する場合がある。

新たな勢力変化を発見する場所が自分の移動しているルート上であると気づいたとき、植物を移動させている犯人が自分である可能性が浮上したのである。調査は毎週行っており、校内全域を歩いている。靴に付着した種子は、ある程度の距離を移動すれば自然に落ちる。そこがその植物にとっての好適地であれば、めでたく勢力を広げられたことになるのである。

「種をまく人」は本人が意図せずになる場合がある、ということである。これは自然環境の攪乱が人為的に起こされた見本のようなものでもある。ヒトが歩くだけでも環境は変化していくのである。

(Miyahashi)

コナラの伐採木

Botany

5月の中旬、第2部室棟前にあったコナラを1本伐採しました。このコナラは、昨年春先数匹のオオスズメバチが幹の周辺を飛びまわっていたために立ち入り規制したので、記憶に残っている人もいないのでしょうか？

スズメバチやオオスズメバチ、ガの仲間やコガネムシ、カナブン、コクワガタにノコギリクワガタ、カブトムシ…多くの虫たちがコナラやクヌギの木には集まります。今回伐採したこのコナラからは昨夏例年にならぬほど多くの樹液が出ていて、遠目からでも幹のあちらこちらに虫がいるのを確認できたほどです。その後、夏の終わり頃から葉が変色し始め、今年の春には新緑の季節にもかかわらず葉はほとんど芽吹きませんでした。生徒の出入りも多く倒木の危険もあるので、用務員さんが伐採をしてくれました。伐採した木の幹の中は、何かの病気で傷み腐食していると思っていましたが、異常は見られませんでした。枯れてしまった原因は不明ですが、昨夏に多くの樹液が出ていたのは枯れる前兆だったのでしょうか…。

では、伐採した木はどうするのか？一般的には伐採木は可燃ごみとして処分されます。しかしながら、今回伐採したのはコナラの木です。処分なんてもったいない。用途は多くあります。

まず思い付いたのは、シイタケ栽培の原木利用です。伐採した幹を1mほどに切り自然乾燥させ、時期になったらシイタケの種菌を植え付け、林の中に並べておくと2~3年はシイタケが収穫できます。そして、シイタケ栽培が終わったホダ木（シイタケ栽培の木）は10cmほどにカットすれば、カブトムシの登り木やクワガタの産卵木になります。小さなチップ状にするとカブトムシ、クワガタの成虫用飼育マットになり、さらにもっともっと細かく砕き発酵させるとカブトムシの産卵マットやクワガタの幼虫用飼育マットにもなります（発酵段階や他の原材料との配合など様々な手順はありますが…）。また、粉碎機でチップ状にすればガーデニング資材となり、伐採したまま雑木林に放置しておくと、風雨にあたり朽木となりいずれは生き物たちの住処になります。実際に2年前の12月末に志木高にある朽木を削ったところ、色々な生き物たちが出てきました。カブトムシやクワガタの幼虫、ムカデの仲間、さらにはオオスズメバチの女王蜂が越冬していました。ちょっと大きめの洞にはヒキガエルも隠れていました。

そして、今回伐採したコナラの木は…数年後の志木高内の生き物たちの住処となることを期待して1mほどにカットし校内の雑木林に数本置くことにしました。たった1本の伐採木ではありますが、ちょっと思いを巡らせてみるのも面白いものです。

最後に…シイタケ栽培について詳しい人に聞いてみるとこんなことを言われました。

「落葉したら伐採し、年明けからサクラが咲く頃までに植付け」

伐採は11月末頃、種菌の植付けは1月~3月末まで。そして、シイタケが収穫できるのは翌年の秋以降。思い付きではできませんでした。

(Aramaki)

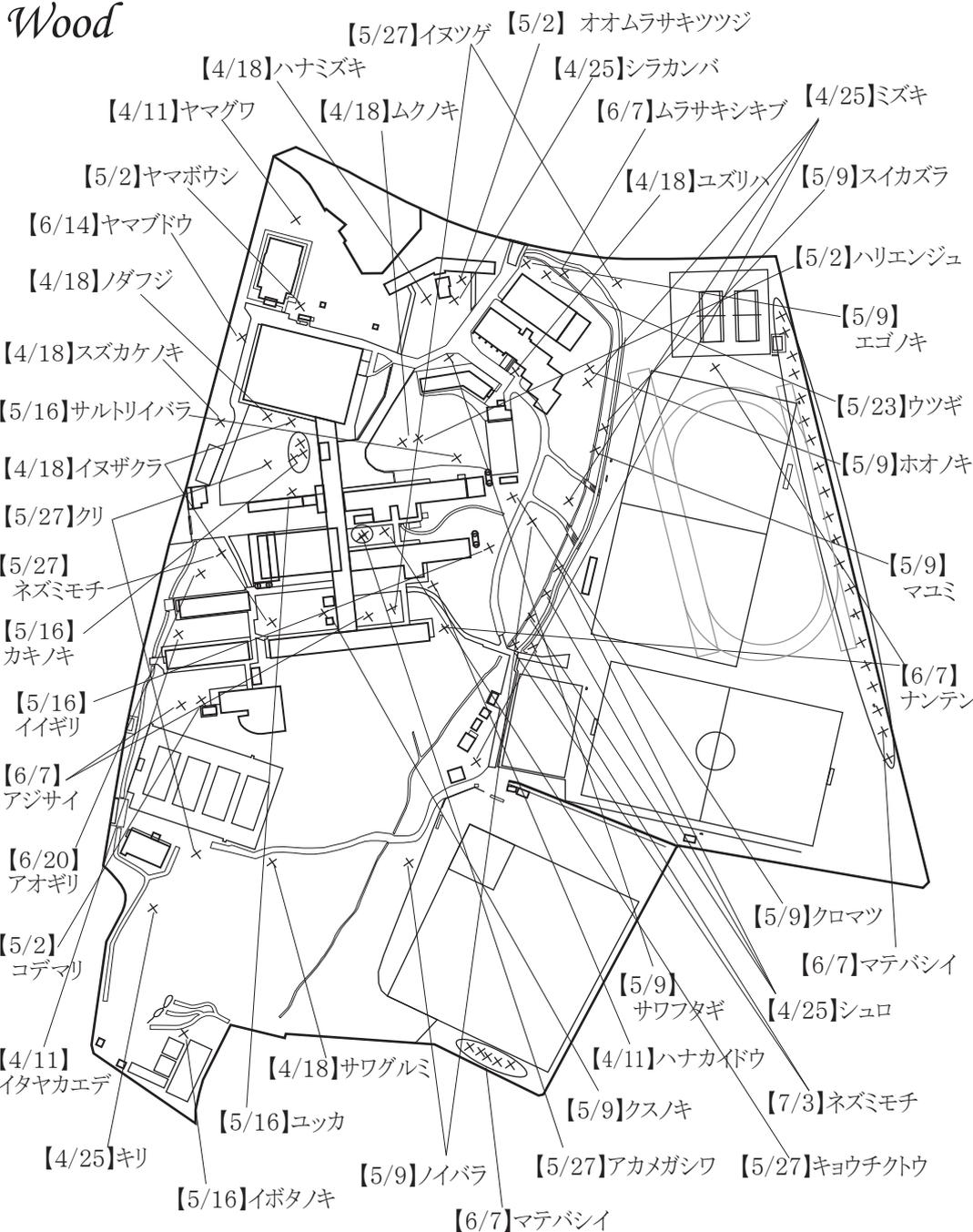
6月から7月にかけての季節は、志木高ではツル植物成長の最盛期となる。すでにヤブガラシやヤマノイモ、ヒルガオ、コヒルガオ等は5月くらいから伸ばし始めているツルに加え、花を咲かせて次世代への準備に余念がない。またこの時期にカラスウリやヘクソカズラが急速に成長を遂げ、林縁、林床の勢力図を塗り替えようとしている。植物は、光合成のための太陽光線を競争相手より先に確保した方が勝ちである。ツル植物は自分を支える構造をつくる代わりにその資源を全て『伸長』という方向に振り分けている。植物界でツル植物が負けることは稀である。

[2014年4月～2014年7月までの開花情報]

Grass

- 11. Apr.2014 ムラサキカタバミ, キランソウ, ニオイスマレ, ヤブタバコ, ウシハコベ
- 18. Apr.2014 フデリンドウ, シロツメクサ, セリ, ナガミヒナゲシ, アメリカアゼナ, オランダガラシ
- 25. Apr.2014 トキワハゼ
- 2. May.2014 アメリカフウロ, オオシジバリ, ツボミオオバコ, フタリシズカ, コヒルガオ, マルバスマレ, オオアマナ, ホソイ, オオバコ
- 9. May.2014 ヤブジラミ, ツメクサ, シバクサ, ニワゼキショウ, ハハコグサ, イヌガラシ, アカバナ, カモジグサ, チチコグサ
- 16. May.2014 タチイヌノフグリ, ウマゴヤシ, ヒルガオ
- 23. May.2014 ヒメジョオン, ドクダミ, アサザ, スイレン, ノビル, コナスビ, キキョウソウ
- 27. May.2014 ハキダメギク, ユキノシタ, ブタナ, ダイコン, ワルナスビ, ムラサキサギゴケ
- 7. Jun.2014 ミチヤナギ, ヒメヨツバムグラ, タケニグサ, ホタルブクロ, ギシギシ
- 14. Jun.2014 ネジバナ, ウラジロチチコグサ, エノコログサ, ヨウシュヤマゴボウ, トキワツユクサ, オオアレチノギク, キジムシロ
- 20. Jun.2014 チドメグサ, ハエドクソウ, ツユクサ, ミズヒキ, コナスビ
- 27. Jun.2014 ヤマノイモ, ジャノヒゲ, ヤブガラシ, サクラタデ
- 3. Jul.2014 ミツバ, イシミカワ, ヤブマオ, ヒメガマ, ヘクソカズラ, ヒドリジョウゴ

Wood



(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	動物・環境	井澤 智浩 (Izawa)
	鳥類・植物	速水 淳子 (Hayami)
	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	植物・編集	荒巻 知子 (Aramaki)